

室生犀星

芥川君と僕

芥川君と僕

漸と二度ばかり会った芥川君から、発句の運座を巻くくから来ないかと誘われて、芥川君の家へ確か二度目くらいに行つた。梅雨の霽れた爽かな一日であつた。即題は夏羽織と梅雨ばれと其他の何かであつた。主人を初め久米、菊池の両君や岡、江口、佐々木君なども来ていて、自分は久し振りで初句を作つた。その時にどういう気持か自分は久米君に題して時めく小説家としての彼をねぎらうた句を、夏羽織に事よせて作つたのだ。久米君はこ

ういう発句はいかんと云うようなことを云ったが、自分は引身を感じた。何時か久米君にあの時の話をして談笑したいと今でも思つて居る。

芥川君や久米君は作家生活に物慣れた世間をずっと見通しが利いている時分であるのに、自分はまだ何も分らぬ井蛙の野人であつた。自分のよしとしたことも却て人に不快を与える程の、まずい程拙な挨拶振りに過ぎなかつた。自分は夕方早めに帰つたが、明らかに彼らに在るものと、自分との間に非常な洗練のきめの違ふことを感じたが、どうも隔離を感じ過ぎ、手の付け様が無かつた。

今から考えるとあの時分には久米君にしる芥川君にしろ、自分は格別な高さで声望とに鍛えられた何物かを持っていた。その高さは根本的に為人を叩き上げ、斬り込む隙間もない手堅さであった。あの時に自分は反感を有たなかったことは好いことであつた。自分はその後芥川君とつきあい、彼の難攻不落の城に入りながらどれだけ得をしたかも知れなかつた。自分は時に彼の高飛車は調子が彼自身では常識にまで漕ぎつけていることに、必然に微笑みを感じるのであつた。

自分は芥川君とつきあう様になつてから全く彼からの

巧みな誘い出しに惹かれて、自分の中に眠っていたものを醒されたと云ってよい。彼が針の穴からも覗き込んで来ているのに驚き、開いた戸からもやあと云って這入って来るのに驚いた。雑談の中からも色々聞くべきことが多かった。自分は良友を持っているけれど、自分を叩き上げるために要のある人は尠い。それに自分は楽な交友ばかりしているせいか、頭の坐りが低かったとも云えた。人間は楽な交友をしていたらしまいに馬鹿になるものだ。彼の云うことは自分に取って物珍らしいというより、当然自分の感じもし考えてもいることを、彼の言葉で話

されると快い調和をさえ感じるのであった。

今から思うと自分が小説の書き出しころに芥川君と早く知り合っていたら、最つと得をしたろうと思つた。最後に書く自叙伝をさきに書いたりして、作家としての本道を取り違えたことが多かつた。全く小説というものは余程心が決つていて、人物ができてから書くものだといふことを此頃沁々感じている。底のある如くして底のないものは小説であらう。

日本文学電子図書館

芥川君と僕

著 者：室生犀星

制作者：宮澤一郎

底 本：「芥川龍之介の人と作 上」
三笠書房

昭和18年4月15日 初版印刷

昭和18年4月20日 初版発行

日本文学電子図書館